

京城帝國大學における朝鮮儒學研究

－ 高橋亨と藤塚鄰を中心に

李 曉 辰*

- 1.はじめに
2. 京城帝國大學カリキュラムから見る朝鮮儒教関連講義
3. 朝鮮儒教研究につとめた教員
 - 1) 高橋亨
 - 2) 藤塚鄰
4. 朝鮮儒學認識の連続性と差別性
5. おわりに

국문 초록

경성제국대학(예과 1924년, 본과 1926년 개교)은 일제강점기에 설치된 유일한 종합대학이었으며 교육기관 및 학술기관으로서 한국 근대 학술에 중요한 위치를 차지하고 있다. 비록 法文學部和 醫學部の 단 두 개의 학부만으로 구성되어 종합대학으로서는 작은 규모라고 할 수 있지만, 동양학의 거점을 표방하며 한국(朝鮮)과 중국(支那)의 역사·언어·문학·철학 등의 강좌를 개설하며 활발하게 연구를 진행하였다.

특히 「朝鮮史講座」 및 「朝鮮語學·朝鮮文學講座」를 두 강좌씩 설치함으로써 소위 「朝鮮學」이라고 불릴만한 연구가 실시될 제도적 토대를 마련했다. 하지만 이렇게 제도화된 「講座」는 아니지만 하나의 「現象」으로서

* 日本關西大學大學院東アジア文化研究科博士課程/ leehyojinis@gmail.com

당시 활발하게 연구되었던 분야가 존재했는데 「朝鮮儒學研究」가 바로 그것이다. 비록 전공으로서 「朝鮮哲學(思想史)講座」는 존재하지 않았지만 교수들에 의해 활발하게 연구되고 정규 커리큘럼 내에서 수업이 행해졌던 것이다.

본고에서는 조선유학을 연구한 대표적 교수로 朝鮮語學·文學講座의 교수인 高橋亨(다카하시 도루)와 支那哲學(中國哲學)講座의 교수인 藤塚鄰(후지쓰카 치카시)에 대해서 검토해 볼 것이다. 한국유학연구자로서 널리 알려져 있는 高橋亨은 「朝鮮思想史概說」을 지속적으로 강의했으며 藤塚鄰는 金正禧를 중심으로 한 18·19세기 문화교섭에 관해 깊이 연구하고 수업에도 반영했다. 두 사람은 동경제국대학의 선후배 관계로, 당시 일본학술계에 팽배했던 한국유학=주자학이라는 도식을 무비판적으로 수용하고 있었다. 하지만 흥미로운 점은 다카하시와 후지쓰카의 한국유학에 대한 인식이 연구가 심화됨에 따라 수정된다는 점이다. 그리고 그 결과 다카하시는 한국 유학은 주자학에 불과하고 자신만의 철학은 없다는 한국유학 不在論을 주장했지만 후지쓰카는 이러한 주장에 의심을 품고 연구를 계속해 박제가, 김정희 등의 유학자를 재평가했다. 이와 같이 비슷한 학술적 배경을 가진 두 일본인 학자가 경성제국대학이라는 공간에서 행한 한국 유학연구가 결과적으로는 상반된 한국유학인식을 낳게 된 것이다. 다카하시와 후지쓰카 두 경성제대 교수의 한국유학 인식과 연구 내용을 검토하고 분석함으로써 경성제국대학 내에서 이루어졌던 한국유학 연구의 실재를 파악해 볼 수 있을 것이다.

● 주제어

경성제국대학, 다카하시 도루(高橋亨), 후지쓰카 치카시(藤塚鄰), 근대한국유학, 근대한국학

1. はじめに

京城帝國大學は、植民地時代における最高の教育機關であり、また學術機關であった。日本政府は、外地としては初めて帝國大學を韓國に設置することを決定し、1924年に予科が、1926年に本科が開校された。法文學部と醫學部の二學部の総合大學としては小規模であったが、東洋學の據点を目指して韓國(朝鮮)および中國(支那)の文學・哲學・史學など、あらゆる分野の研究が行われた。そして、これまで高等教育の機會がなかった韓國のエリート學生が集まり、教員構成もほとんど東京帝國大學出身の優秀な學者たちであった。招聘された教員らは、一人が一つの「講座」(專攻)を担当し、各々授業を担う一方、戦略的ないしは個人的に各分野に関する研究を行い、多數の研究業績を残したのである。

これまで指摘されているように、朝鮮關連の講座は新しい分野であった、そもそも自分の專攻とは違う講座を担当するケースも多かった。總督府の「旧慣制度調査」事業の遂行や京城帝國大學で新しく開設された「朝鮮文學講座」「朝鮮史講座」などを担当することから、所謂「朝鮮學」の研究を始めた人物も少なくない¹⁾。高橋亨、小田省吾、小倉進平などがその代表的な例としてあげられる。特に、東洋學に関する各々の講座は、調査事業を目的とする研究プロジェクトでもあったのである。ところが、明確な專攻としては存在していなかったが、活發に研究された分野がある。それは「朝鮮儒學」に関する研究である。朝鮮文學講座を担当した高橋亨、支那哲學講座を担当した藤塚鄰は、みな朝鮮儒學を深く研究し、それにより博士号を取得した人物である。彼らが残した朝鮮儒學に関する著作は、その量はもとより、内容的にも高い水準のものであった。

高橋亨(1878-1967)は、語學・文學(物語・諺)、思想(儒教・仏

1) 朴光賢「식민지『帝國大學』의 성립을 둘러싼 경합의 양상과 教授陣의 類型」(『日本學』第二八輯、東國大學日本學研究所、2009年)、全京秀、宮原葉子譯「京城帝國大學の學術調査と「京城學派」の誕生—人類學分野にフォーカスを合わせて—」(『朝鮮學報』第214輯、朝鮮學會、2010年)。

教)、朝鮮文學(民謠)などの多用な分野で自分の韓國學研究を進めていた。特に朝鮮儒學研究に及ぼした影響は大きいと言われている²⁾。一方、藤塚鄰(1879-1948)は、金正喜研究の大家であり金正喜を再発見した人物として知られている。1926年から1940年まで京城帝國大學の支那哲學講座の教授として在韓し、『論語』や日清鮮の交流に關する著作を多數残した。

二人は、東京帝國大學支那哲學科出身者(高橋の卒業時は漢學科)として、傳統的漢學と近代的學問の双方を修得した世代であった。また、京城帝國大學を據点とし、朝鮮儒學研究において多くの研究業績を残した人物でもあった。これまでは、彼らによる朝鮮儒學の諸研究は制度化された「講座」の枠内ではなく、ある「現象」として存在したため、これらをまとめて考えられてこなかった。本稿では、高橋亨と藤塚鄰の二者の日本人研究者を中心に、彼らが朝鮮儒學に對してどのように認識していたかについて比較・分析し、京城帝國大學時代に構築された朝鮮儒學研究は何であったのかについて考察したい。これらを総合的に検討することによって、京城帝國大學で行われた朝鮮儒學研究の内容と意義を明らかにすることができると思われる。

2. 京城帝國大學カリキュラムから見る朝鮮儒教關連講義

京城帝國大學の法文學部は他の帝國大學と同様に講座制を採擇し、開校時に21種、23講座が置かれた。「朝鮮史學講座」と「朝鮮語學・朝鮮文學講座」が二講座ずつ設置され、他は全て一講座のみの設置である。

2) 崔英成「高橋亨의 韓國 儒學觀 批判」(『오늘의 동양사상』第13号、예문동양사상 사연구원、2005年)。

【表1】京城帝國大學の開設講座³⁾

講座種類	講座數	講座種類	講座數
憲法・行政法	1	美學・美術史	1
民法・民事訴訟法	1	教育學	1
刑法・刑事訴訟法	1	社會學	1
經濟學	1	國史學	1
政治學・政治史	1	朝鮮史學	2
羅馬法	1	東洋史學	1
哲學・哲學史	1	國語學、國文學	1
支那哲學	1	朝鮮語學・朝鮮文學	2
倫理學	1	支那語學・支那文學	1
心理學	1	外國語學・外國文學	1
宗教學・宗教史	1	計 21種、23講座	

これらの講座の實際の内容は、担当教員によって決められた。雑誌『青丘學叢』には1931年から1936年までの「講義題名」を載せているので、その具体的講義内容を推測することができる。講座制の特徴上、教員の興味や研究によって、その講座の性格が決定されるのは、よくあることであった。しかし「朝鮮語學・朝鮮文學」第一講座（以下、朝鮮文學講座）の中には、朝鮮文學に關する講義と對等に「朝鮮思想史概説」や「朝鮮における異學派の儒學」など朝鮮思想史・儒學史に關する講義が含まれていた。

3) 『京城帝國大學一覽』(京城帝國大學、1927年)、23-25頁。

【表2】京城帝國大學「朝鮮文學講座」講義題名⁴⁾

年度	講義題名
1931年	朝鮮思想史概説(朝鮮思想及朝鮮信仰史) 大山退溪書節要及退溪詩 朝鮮民謠
1932年	朝鮮思想史概説 朝鮮近代文學 朝鮮近代文學選
1933年	朝鮮思想史概説 朝鮮近代文學 朝鮮上代文學選講讀および練習 朝鮮の歌謠
1934年	朝鮮思想史概説 朝鮮上代および中世文學 練習(朝鮮上代および中世文學選)
1935年	朝鮮文學概論 練習(東人詩話・朝鮮中世文學選)
1936年	朝鮮文學概論 朝鮮における異學派の儒學 朝鮮道學者の文學

また、これとは別に「支那哲學講座」でも、少なからず朝鮮儒學関連講義が行われていた。支那哲學講座は、初代總長の服部宇之吉（1926-1927）により、直接教員が任命され、終戦まで服部の弟子に当たる東京帝國大學支那哲學科の出身者が教授および助教授としてつとめていた⁵⁾。

4) 「京城帝國大學法文學部講義題目」『青丘學叢』第八号以下、青丘學會。

5) 詳しくは、李曉辰「京城帝國大學の支那哲學講座と藤塚鄰」（『文化交渉』創刊号、關西大學東アジア文化研究科、2013年1月）を参照されたい。

【表3】京城帝國大學「支那哲學講座」講義名⁶⁾

年度	講義題名
1931年	支那哲學史概説 支那哲學演習
1932年	支那倫理學概説 清朝經學史 支那哲學演習 (論語正義)
1933年	支那倫理學概説 清朝經學の研究 (主として論語學) 詩經講讀演習
1934年	支那倫理學概説 李朝に於ける清朝文化の移入 演習 (清代経師論集)
1935年	支那倫理學概説 李朝に於ける清朝文化の移入
1936年	支那倫理學概説 李朝に於ける清朝文化の移入

【表3】からわかるように、「朝鮮文學講座」ほどではないが、「支那哲學講座」にも1934年から「李朝ニ於ケル清朝文化ノ移入」という講義が行われたことが確認できる。この講義は支那哲學講座の特性と無関係ではないが、担当教員の研究内容などに照らしてみると、英・正祖代の韓國儒學者と清朝學者との文化交渉が主な内容であると推測される。

なぜ、講座名と多少離れている内容が実際に教えられたのか。それは京城帝國大學が有している研究機關としての性格と密接に関連している。京城帝國大學は設立時から「東洋文化研究の權威」⁷⁾となることを使命とし、教授陣は日本政府から朝鮮と支那を調査・研究する任務を与えられていた⁸⁾。しかし、すべての研究が調査事業や任務として行われたわけではなかった。教員の個人的關心にもとづく研究も活発に行われていた。その制度と學術の隙間から、京城帝國大學における朝鮮儒學研究と講義が始まっ

6) 「京城帝國大學法文學部講義題目」

7) 服部宇之吉「京城帝國大學始業式に於ける總長訓辭」『文教の朝鮮：京城帝國大學開學記念号』6、朝鮮教育會、1926年、3-4頁。

8) 이상우 「한 식민지 국문학자가 마주친 ‘동양연구’의 길: 김재철문」(ある植民地國文學者が會った「東洋研究の道：金在喆論」)『人文研究』52、嶺南大學人文科學研究所、2007年、230頁。

たといえよう。

3. 朝鮮儒敎研究につとめた敎員

本章では、前述した「朝鮮文學講座」と「支那哲學講座」を担当していた高橋亨と藤塚鄰の生涯と著作について簡単に紹介する。「支那哲學講座」には、藤塚の後任として1940年から阿部吉雄(1905-1978)が赴任し、退溪について多数の著作を残したが、阿部の仕事に関しては今後の課題とし、本稿では高橋と藤塚に焦点を当てて検討していきたい。

1) 高橋亨⁹⁾

(1) 高橋亨の生涯

高橋亨(1878-1967)は韓國の思想・文化・歴史などを初めて近代的

9) 高橋亨の生涯と學術活動については、李曉辰「京城帝国大学における高橋亨とその學術活動」(『千里山論文集』第85号、関西大学大学院文学研究科、2011年3月)、通堂あゆみ「高橋亨と朝鮮」(川原秀城・金光來編訳『高橋亨朝鮮儒學論集』、東京：知泉書館、2011年)を参照されたい。また、高橋の朝鮮学については、李曉辰「高橋亨の韓國学研究—儒學・仏敎・文学研究を中心に」(『退溪學論集』第12号、退溪学会(韓国)、2013年12月)を参照されたい。高橋の儒學研究に関する先行研究は、尹絲淳「『高橋亨의 韓國儒學觀』 검토」(『韓國學』12、韓國學研究所、1976年)、權純哲「高橋亨の朝鮮思想史研究」(『埼玉大學紀要敎養學部』33、埼玉大學敎養學部、1997年)、최영성「高橋亨의 韓國儒學觀 研究」(『哲學研究』第47輯、大韓哲學會、2000年)、이형성「高橋亨의 朝鮮儒學史研究의 影響과 克復」(『高橋亨의 朝鮮儒學史』、예문서원、2001年)、이승률「日帝時期 韓國儒學思想史 著述史에 관한 一考察」(『東洋哲學研究』第三七輯、東洋哲學研究會、2004年)、박홍식「高橋亨의 朝鮮陽明學研究에 대한 小考」(『오늘의 동양사상』第13號、예문서원、2005年)、홍원식「張志淵과 高橋亨의 '儒者·儒學者 不二·不一' 論爭」(『오늘의 동양사상』第13號、예문서원、2005年)、최재목·이효진「張志淵と高橋亨の『紙上論爭』について」(『日本文化研究』第32輯、東アジア日本學會[韓国]、2009年)、조남호「高橋亨、배중호、韓國儒學史」(『대동철학회지』第55輯、대동철학회、2011年)、김기주「다카하시 도루의 朝鮮儒學觀을 다시 논함」(『退溪學報』第132号、退溪學研究院、2012年)などがある。

學問の對象として認識し、生涯にわたって韓國思想史および韓國文學に關する研究を行った人物とされている。彼は韓國政府の招待で韓國に移り住み、教育者・研究者・官僚として多様な分野において韓國學(朝鮮學)を研究した。

高橋は1902年(明治35年)東京帝國大學漢學科を卒業し、1904年(明治37年)27歳で渡韓した。その後、40余年にわたって韓國に滞在し、初期は總督府から任務を与えられ、京城帝國大學就任後からは教育者・研究者として活動した。高橋は、日本最高學府の東京帝國大學で成熟しつつあった東洋學とりわけ「東洋史學」「東洋哲學」研究の影響を受け、近代的な學問方法を學び、學問的基礎を修得していた¹⁰⁾。渡韓直後は韓國語の學習に専念し、1909年(明治42年)には『韓語文典』を出版するほど韓國語を自由に驅使できるようになった。同時に宗教調査囑託や図書調査囑託として韓國各地で儒教および仏教を調査し、韓國の文化・思想を理解することに努めた。その長年の韓國語および韓國の文化・思想に關する知識は、高橋が京城帝國大學の朝鮮文學を担当するのに重要な役割を果たすことになった。

1926年(昭和元年)、京城帝國大學が開設されるとその教授となり、法文學部「朝鮮語學・朝鮮文學」第一講座を担当するとともに、多數の著作を残すなど、いっそう活潑な研究活動を進めた。1940年、京城帝國大學を名譽教授として退職した後は、仏教系の私立大學であった京城惠化專門學校(現東國大學)の校長となり、京城經學院提學および明倫鍊成所長、朝鮮儒道連合會副會長をつとめた。このような業績からわかるように、高橋は韓國仏教・儒教研究の權威者として廣く知られていた。

高橋は戦後の1946年(昭和21年)に歸國し、日本における韓國學を發展に力を注いだ。現在、日本の韓國學の重要な機關である「朝鮮學會」が天理大學を據点としているのは高橋が天理大學の教授であったことと深い關係がある。また、朝鮮學會大會を開催し、韓國の學者を招聘するなど、韓

10) 權純哲「高橋亨の朝鮮思想史研究」(『埼玉大學紀要教養學部』33、埼玉大學教養學部、1997年)、74頁。

國との學問的交流にも盡力した¹¹⁾。

(2) 高橋亨の著作¹²⁾

高橋は、渡韓以來韓國の思想・宗教・文學・教育などの緒分野において膨大な著作を残した。これらの著作は朝鮮學會による「高橋亨先生著作年表」¹³⁾に紹介されており、この目録には著書および翻譯書の6点を含め、計103点の著作が載せられている¹⁴⁾。著書は『韓語文典』(博文館、1909年)、『朝鮮の物語集附俚諺』(日韓書房、1910年)、『朝鮮の俚諺集附物語』(日韓書房、1914年)、『朝鮮人』(朝鮮總督府、1921年)、『李朝仏教』(寶文館、1929年)の5点があり、儒教研究の代表論文としては「朝鮮儒學大觀」(『朝鮮及滿州』50-52・58・62・64号、朝鮮及滿州社、1912年)¹⁵⁾、「李朝儒學史に於ける主理派主氣派の發達」(『朝鮮支那文化の研究』、京城帝國大學法文學會第二部論纂第1集、1929年)、「李退溪」(『斯文』21号、斯文會、1939年)などを舉げることができる。

高橋は、總督府からの命により、儒生の動向を調査・視察し、1912年雜誌『朝鮮及滿州』に「朝鮮儒學大觀」を發表した。これは近代韓國における退溪に關するまとまった初めての著作とされる¹⁶⁾。以後、彼は持續的に朝鮮儒學史の研究を行い、1929年には「李朝儒學史に於ける主理派主氣派の發

11) 李曉辰「京城帝國大學における高橋亨とその學術活動」、李曉辰「高橋亨の韓國學研究—儒學・仏教・文學研究を中心に」を参照されたい。

12) 高橋の著作の中で韓国語訳がされたのは、조남호譯・高橋亨著『朝鮮의 儒學』(서울:소나무, 1999年)、이형성譯・高橋亨著『朝鮮儒學史』(서울:예문서원, 2001年)、구인모譯・高橋亨著『식민지 조선인을 논하다』(서울:동국대학교출판부, 2010年)がある。日本では、2011年の9月に川原秀城・金光来により『高橋亨朝鮮儒學論集』(東京:知泉書館)が出版された。

13) 『朝鮮學報:高橋先生頌壽記念号』第14輯、朝鮮學會、1959年。

14) しかし、筆者の調査によると、この目録に紹介されていない著作も多數あるため、實際の著作は120点ほどであると考えられる。

15) 『朝鮮史講座』(朝鮮史學會、1924年)に同じタイトルで掲載されているものもあるが、本文内容は異なる。

16) 井上厚史「近代日本においえる李退溪研究の系譜學」(『總合政策論叢』第18号、島根縣立大學、2010年2月)、74頁。

達」17)を發表した。この論文は、「主理派」「主氣派」という概念を用いて朝鮮儒學史を説明しようとしたもので、それ以後の韓國儒學史研究の枠組みを作ったといわれている18)。しかし、高橋が韓國儒學の特徴として「固着性」と「從屬性」を挙げ、韓國思想の価値と獨創性を否定していたため、韓國思想史研究における彼の先驅的面は認められながらも、「御用學者」の典型として批判されることも多い19)。

高橋は、朝鮮儒學史に關する著作のほか、文學や仏教について論じたものも多數残している。特に『李朝仏教』は近代的方法論による最初の韓國仏教史研究書としてその意義を持つ20)。

2) 藤塚鄰21)

(1) 藤塚鄰の生涯

藤塚鄰 (1879-1948) は、仙台的第二高等學校卒業後、東京帝國大學に入學し、支那哲學を専攻した。藤塚は当時教授であった星野恒

17) 『朝鮮支那文化の研究』(京城帝國學會法文學會第二部論纂、第一集)。

18) 尹絲淳『『高橋亨의 韓國儒學觀』검토』(「高橋亨の韓國儒學觀」の検討)『韓國學』12、韓國學研究所、1976年、24頁。

19) 尹絲淳『『高橋亨의 韓國儒學觀』검토』、權純哲「高橋亨の朝鮮思想史研究」、崔英成「高橋亨의 韓國儒學觀 批判」などを参照されたい。

20) 李逢春「불교지성의 연구활동과 근대불교학 정립」(『近代東アジアの仏教學』、東國大學出版部、2008年)、16頁。

21) 藤塚鄰の生涯については、「藤塚鄰博士年譜」(座談会「先学を語る—藤塚鄰博士—」『東方学』第69号、東方学会、1985年)、『후지쓰카 기증자료 목록집』II(果川文化院、2009年)、「藤塚鄰의 삶과 학문」(김채식『秋史研究』第3号、秋史研究会、2006年)、李曉辰「京城帝國大學の支那哲學講座と藤塚鄰」(『文化交渉』創刊号、関西大学東アジア文化研究科、2013年)などが詳細である。藤塚の朝鮮儒學研究についての先行研究は、李曉辰「近代日韓における金正喜認識—藤塚鄰の金正喜研究と『阮堂先生全集』刊行を起点として」(『東アジア文化交渉研究』第7号、関西大学文化交渉学教育拠点、2014年)があり、近年、鄭珉氏によりハーバード燕京圖書館に散在していた一部の藤塚藏書が紹介され、『18세기 한중 지식인의 문예공화국 - 하버드 연칭도서관에서 만난 후지쓰카 길력선』(ソウル: 문학동네、2014年)にまとまった。

(1839-1917) から『皇清經解』の研究および利用について教わった。この時期を通じて藤塚は清朝考証學および經學の文獻的研究の基盤を作ったのである。星野以外にも、中國文學の塩谷温 (1878-1962) や中國哲學の宇野哲人 (1875-1974) などからも影響を受けた。

藤塚は、1909年 (明治42年) 30歳で東京帝國大學を卒業し、同大學院に進むが、半年で退學して1909年8月から名古屋の第八高等學校の漢文講師になる。この時期、藤塚から薦められ中國哲學の道に入ったのが加藤常賢 (1894-1978)²²⁾であった。第八高等學校に在職していた藤塚は1921年 (大正10年) 43歳で官命により、清朝經學研究のため10月から一年半ほど中國に在留することになる。藤塚は、毎日のように北京の琉璃廠書肆に通っていたある日、朴齊家に關する記録を読み、興味を持った。1923年日本に戻ってきた藤塚は、文部省開催の漢文科教授會議に出席するため東京に行く際に服部から新設する京城帝國大學の支那哲學講座を担当してほしいという勧誘を受けた。その一ヶ月後第八高等學校を辭任し、1926年 (大正15年) 4月に釜山に到着したのである。

開校と同時に法文學部支那哲學講座を担当した藤塚は、1940年 (昭和15年) の退職まで計15年間講座を續けた。1930年 (昭和5年) からは支那語學と支那文學の講座を分担した。1930年~1931年、法文學部長を勤めた。渡韓以來、金正喜 (阮堂) 研究に没頭した藤塚は、その10年間の研究成果を集め、1936年、58歳の時に『李朝に於ける清朝文化の移入と金阮堂』²³⁾により東京大學の博士學位を收得した。

1940年、62歳で京城帝國大學を退職した藤塚は、日本に戻り大東文化

22) 加藤は、第八高等學校時代の弟子で藤塚の勧誘で中國哲學を勉強し、廣島大學および東京大學教授を歴任した。1928年から1933年までは、京城帝國大學の助教授となった。藤塚の死後、著書刊行にも参加した。

23) 博士論文審査は、中國哲學專攻の宇野哲人、中國文學專攻の塩谷温および東洋史 (朝鮮史) 專攻の池内宏が担当した。のちにこの論文は、子の藤塚明直により『清朝文化東傳の研究』(図書刊行會、1975)として刊行された。この論文はのちに『清朝文化東傳の研究—嘉慶・道光學壇と李朝の金阮堂』(圖書刊行會、1975年)として出版されている。

學院の教授になり、1948年(昭和23年)1月、70歳で斯文會理事長、3月には大東文化學院の總長となったが、まもなく死去した。藤塚の死後、1990年代には子の明直が父の遺志を受けて残っている資料をすべて韓國の果川文化院に寄贈した²⁴⁾。

(2) 藤塚鄰の著作²⁵⁾

藤塚の著書は『孫子新釋』(藤塚鄰・森西洲共著、弘道館、1943年)、『日鮮清の文化交流』(中文館書店、1947年)、『論語總說』(弘文堂、1949年5月)、『論語の味讀』(斯文會、孔子生誕二五〇〇年記念會、1949年10月)、『清朝文化東伝の研究』(藤塚明直編、國書刊行會、1975年)の5点がある。藤塚はもともと論語について深く研究していて、1949年には論語の概論書である『論語總說』と解釋書である『論語の味讀』を同時に出版している。『論語總說』最後の「余說」で韓國の儒學者らの徂徠學に對する認識と評價をあげているのが特徴的である。渡韓してからは、18、19世紀の朝鮮儒學者と清朝・日本の儒學者との文化交渉に興味を持ち、『日鮮清の文化交流』および『清朝文化東伝の研究』をまとめた。これらは、日鮮清をすべて視野に入れて、文獻と手紙等で行われた三國の學者たちの交流を調査と實証により明らかにしたものである。

藤塚の代表作『清朝文化東伝の研究』は、藤塚の博士論文を改訂して出版したもので、全537頁にのぼる大作である。藤塚の死後、子の明直によって編纂され、宇野精一の序文と加藤常賢の跋文が収録されている。『日鮮清の文化交流』と内容的に重複している所も多いが、朝鮮時代の儒學者金正喜(秋史、1786-1856、阮堂とも号す)を中心として日鮮清の文化交流を説

24) 李曉辰「京城帝國大學と台北帝國大學の開設と哲學關連講座——中國哲學を中心に」(『文化交渉』第2号、關西大學東アジア文化研究科、2013年12月)を参照されたい。

25) 藤塚の著作『清朝文化東伝の研究』は、朴熙永譯・藤塚隣著・藤塚明直編『秋史金正喜의 또 다른 얼굴』(서울: 아카데미하우스、1994年)、윤철규外譯・藤塚隣著・藤塚明直編『秋史 金正喜 研究: 清朝文化 東傳의 研究 한글완역본』(果川文化院、2009年)の二冊の著書に韓國翻譯されている。

明しているのがその特徴である。資料の量と内容の精密さにおいても『日鮮清の文化交流』をはるかに凌駕している。本書は考証學を中心とする清朝文化東伝の研究書でありながら、最も詳細な金正喜研究書にもなっているのである。

4. 朝鮮儒學認識の連続性と差別性

儒教は、近代日本において帝國的學知構築の時代状況の中で、福澤諭吉、丸山眞男、井上哲次郎らによって近代化を阻害するものとして批判されてきた。彼らによる朱子學批判と中國・朝鮮批判の言説が生産されている雰囲気の中で、朝鮮儒學研究が始まったのである²⁶⁾。井上哲次郎は『日本陽明學派之哲學』で「然れども朱子學は能く博學多識の士を出だせども動もすれば輒ち人をして固陋迂腐ならしむるの弊あり」²⁷⁾と述べ、『日本朱子學派之哲學』では、朱子學派の思想は「單調」²⁸⁾であり、古學派と陽明學派に及ばないとしている。このような観点に立って朝鮮儒學を研究・批判した人物が他ならぬ高橋亨であった。高橋は、井上哲次郎と遠藤隆吉によって継承・先鋭化された朝鮮儒學に對する認識を受け繼いで「朝鮮儒學不在論」を主張した代表的な人物である²⁹⁾。

高橋が朝鮮儒學に興味を持ち始めたのは、1911年からであった。總督府の命により儒生の状況を調査するため三南(忠清道・全羅道・慶尙道)を訪問した彼は、朝鮮儒教が單純な學問以上の価値を有していることに氣づき、朝鮮儒教の研究を決心することになった³⁰⁾。彼は、朝鮮儒學は朱子學に他ならないと規定し、日本における朱子學批判論を用いて朝鮮儒學全般に對する批判にまで擴張させたのである。さらに、それを朝鮮人の民族性

26) 井上厚史「封印された朝鮮儒教」(『現代思想』第42卷第4号、青土社、2014年3月)、115頁。

27) 井上哲次郎『日本陽明學派之哲學』(富山房、1900年)、4頁。

28) 井上哲次郎『日本朱子學派之哲學』(富山房、1905年)、599頁。

29) 井上厚史「封印された朝鮮儒教」、116頁。

30) 高橋亨「緒言」『李朝儒教』(寶文館、1929年)、7-8頁。

とつなげて思想上の固着性・従屬性・党派性を究明する論調で朝鮮儒學を説明しようとした。

李朝に入ってからからの朝鮮の思想は全く儒教で支配されている³¹⁾
(1912年)

され共支那に於ける儒學の學派は朱子一派に非ず。当時既に之と對抗せる陸象山あり明に王陽明あり老莊の學亦一部の思想を支配せり。獨り朝鮮は一度朱子學を奉ぜし以來他の學派には一顧を与へず反りて之を異端視して排斥せり。……約七百年間朱子學の理氣二原理の學說に満足し之に盲從して他に合理的哲學なしと信ぜり。朝鮮の哲學には進歩なく發達なし初より化石せり³²⁾ (1917年)

朝鮮の儒教は即ち朱子學でありまして、朱子學の外に儒教はないのであります³³⁾ (1923年)

これらの資料からもわかるように、高橋は「朝鮮儒學=朱子學」と認識し、朱子學以外の朝鮮儒學の存在可能性を全面否定している。また、それを日本の陽明學や古學派と比較し、朝鮮の独自の思想が存在しないという自分の説に根據づけたのである。このような高橋の認識は、朝鮮儒學に對する偏見を日本に流布し定着させ、当時および以降の認識に多大な影響を及ぼした³⁴⁾。一方、高橋が行った一連の朝鮮儒學研究は、韓國側の學者たちの反論を呼び起こし、近代的方法論による朝鮮儒學研究が本格的に始まるきっかけにもなった³⁵⁾。日本側においては、すでに高橋の朝鮮儒學論

31) 高橋亨「朝鮮儒學大觀」(『朝鮮及滿州』50号、朝鮮及滿州社、1912年)、28頁。

32) 高橋亨「朝鮮人」(『日本社會學院年報』第4年第三・四・五合冊、日本社會學院事務所、1917年)、412頁。

33) 高橋亨「朝鮮に於ける儒教」(『斯文』第五編第二号、斯文會)、1923年4月、79頁。

34) 井上厚史「封印された朝鮮儒教」、116頁。

35) 金基柱「다카하시 도루의 朝鮮儒學觀을 다시 논함」(『退溪學報』第132輯、退溪學研究院、2012年)、279頁。代表的な例として張志淵(1864~1921、韋

は、一般的に廣く受け入れられていたようである。藤塚の退職後、京城帝國大學支那哲學講座の教員として朝鮮儒學を研究した阿部吉雄も「李氏朝鮮は朱子學一色に思想統制を行い、そのために思想文化が沈滞した」³⁶⁾、「朱子學者に伴う潔癖性、理窟好きは、朝鮮の党争の場合よくあらわれているように思われる」³⁷⁾と述べ、高橋が作り上げた朝鮮儒學イメージを継承している。

藤塚も渡韓初期には、高橋のよう朱子學に對しては否定的であった。朝鮮儒學に對しても「李朝五百年間は、殆ど全く朱子學に没頭して居たと云つても可なり」³⁸⁾と述べ、また「如何せん朱子學の一派に限られ、年久しきを経ては、伝者其の人を得ず、單調、平板、偏狹、固陋の弊に墮するを免れなかった」³⁹⁾と指摘していることから、批判的認識を持っていたことがわかる。藤塚は、高橋より6年後の1908年に東京帝國大學支那哲学科を卒業した。漢学科から支那哲学科と名称は変わったものの、教員や講義内容にさほど差はなかった。藤塚も先輩たちと同様に、井上哲次郎の儒教認識と概念を基本的に共有していた可能性が高い。さらに、清朝考証學を重んじていた藤塚にとって、朱子學の國と知られていた朝鮮の儒教に興味を持っていなかったのは、ある意味で当然だといえる。

しかし、朝鮮儒學に對するこのような認識は、渡韓以後大きく変わる。彼はそれ以前、北京の琉璃廠書肆で朴齊家に關する記録を讀んだことがあったが、京城帝國大學に赴任してから、朴が朝鮮時代の人であったことを知り、さらに彼の弟子である金正喜が著名な清朝考証學者たちと深い學

庵)と高橋との逸話をあげることができる。1915年、張志淵と高橋は所謂「紙上論争」を行い、高橋の朝鮮儒學研究の歪曲に對する反論として『朝鮮儒學淵源』(匯東書館、1922年)を著述したと言われている。

36) 阿部吉雄『日本朱子學と朝鮮』、556頁。

37) 阿部吉雄『日本朱子學と朝鮮』、557頁。

38) 藤塚鄰「物徂徠の論語徵と清朝の経師」(『支那學研究』第四編、斯文會)、1935年1月、128頁。

39) 藤塚鄰『清朝文化東伝の研究』(藤塚明直編、國書刊行會、1975年)、9頁。「單調、偏狹、固陋」は、すべて井上が朱子學を説明する際に用いた用語であった(『日本朱子學派之哲學』、597-599頁)。

術的交流をしていたことを知ったのである。これがきっかけとなり、藤塚は英祖・正祖代の朝鮮儒學について研究を進めていった。その過程で、彼は朝鮮儒學における一般的認識に對し、次のように疑問を抱き、朝鮮儒學の新しい側面を發見することになる。

人あるいは告げて曰く、李朝五百年の文化、宋明唾余の學を除いて、他に何物ありやと。其れ然るか、其れ然らざるか。(…)曩に李朝學壇を目して、宋明末疏の學問以外何物を留めずとなし、清朝文化東漸の如き、殆どこれを認めなかつた論者の一孔の見なきを知るとともに、この重大な問題の研究の緊要事たるを痛感し、一面清朝經學研鑽を畢生の目的とする自分の当然な義務なりと信じたが故に、過去十年間、苦心慘憺、極力資料の蒐集を図り、その結果、書籍千余卷、尺牘書畫拓本數千點に達した。40)

このような朝鮮儒學の再認識・再評価は、清朝考証學に精通していた金正喜の存在の發見に伴う変化であった。藤塚は金正喜について「新に實事求是の學を半島に唱明して、宋明末疏の弊に墮した褊狹枯槁の陋風に巨彈を投じ、突突たる一生面を展開した偉大なる學積に至っては、阮堂は正に其の一人者と謂はなければならない」41)と高く評価した。このような藤塚の研究は「從來殆んど顧みられなかつた李朝學壇の尊き一面を懸彰」42)し、高橋と代表される朝鮮儒學不在論に對する反論となり、朝鮮儒學の多様性を証明するものとなった。

藤塚が渡韓した1920年代は朝鮮學研究が量的・質的に深化していた時期であった43)。京城帝國大學の開校により、朝鮮學のあらゆる分野において深い研究が可能となった。1930年代は、既存の朝鮮學研究者に加え、京城帝國大學出身者まで參加した韓國學壇における研究活動も活發に行われ

40) 藤塚鄰「導言」『清朝文化東伝の研究』、4頁。

41) 藤塚鄰「序言」『清朝文化東伝の研究』、72頁。

42) 藤塚鄰「導言」『清朝文化東伝の研究』、4頁。

43) 權純哲「韓國思想史における『實學』の植民地近代性」(『日本アジア研究』第2号、埼玉大學、2005年3月)、11頁。

ていた44)。このような朝鮮學研究の深化は、多様な分野・時代に關する研究と、幅廣い理解・議論が可能になった。このような質の高い研究の蓄積により、朝鮮儒學の分野では、高橋に代表される既存の朝鮮儒學理解に對する様々な反応が生じたのである。具体的には、藤塚は清朝考証學を通じて朝鮮儒學の新しい側面を明らかにしようとし、韓國側の學者たちは實學運動を提唱し、丁若鏞を中心とした實學派（經濟學派）の發見を通して韓國儒學の獨自性と優秀性を明らかにしようとしたのである。

このように、高橋は通史的朝鮮儒學史を書いたといわれるものの、朱子學傳來以前の思想や他の儒學思想に對する認識が欠けている。また、朝鮮後期の韓國實學もほとんど扱っていない45)。「朝鮮儒學=朱子學」という枠を作り、その枠内で朝鮮儒學の理解を図ったのである。一方、藤塚は金正喜が生きていた18・19世紀に時代を絞って研究を行った。したがって二人は、それぞれの分野において膨大な資料と分析を進めてはいるものの、通史的・全体的に朝鮮儒學を研究するまでには至っていない。また、京城帝國大學内で互いに朝鮮儒學に關する研究と資料を共有していたはずにも關わらず、論文に著しい影響關係は見当たらない46)。

しかし戦後、高橋の場合、韓國儒學史に對する態度には一定の変化が見

44) 朝鮮學運動などの朝鮮學ブームがその代表的な例である。朝鮮學運動の時期と範疇についてはいくつか説があるが、安在鴻(1891-1965)、鄭寅普(1893~不明)などによる『与猶堂全書』(新朝鮮社)の刊行計畫と關連して1934年9月に開催された「茶山逝去99周年記念事業」をきっかけとして全面化したとされる(백승철「1930년대 '朝鮮學運動'의 전개와 民族認識·近代觀」、『歴史と實學』36, 歴史實學會, 2008年), 119頁)。

45) 朝鮮儒學は朱子學一辺倒であると主張していた高橋は、戦後になってからは少し立場を変え、陽明學や丁茶山に關して言及するようになる(高橋亨「朝鮮の陽明學派」、『朝鮮學報』第4輯、朝鮮學會、1953年)、「丁茶山の大學經說」(『天理大學學報』第18輯、天理大學學術研究會、1955年)。

46) 高橋の朝鮮儒學を見る觀點は、時代によって少しずつ変わっていった。特に退溪に關する評価は、1930年代を起点として否定から肯定へ大きく変化するが、これらは彼の朝鮮學研究の深化による朝鮮儒學に對しての再考察・認識の結果であると考えられる(李曉辰「高橋亨の韓國學研究—儒學·仏教·文學研究を中心に」、『退溪學論集』第12号、退溪學會(韓國)、2013年12月)參照)。

られる。それまでは朱子學以外の思想はないと斷言していたものの、「朝鮮の陽明學派」(『朝鮮學報』第4輯, 1953年)や「丁茶山の大學經說」(『天理大學學報』, 1955年)など朱子學以外の分野についての論文をいくつか發表した。また「朝鮮の公羊學派李白雲」では、明の陽明學が明宗・宣宗代に伝えられたことや、正祖・純祖・憲宗代に清朝の漢學が申綽・丁若鏞・金正喜等によって論じられ考据學派的著作が殘されたことを言及し、朝鮮時代における陽明學や考証學の存在を肯定している⁴⁷⁾。このような変化は、おそらく京城帝國大學教授として担った植民地統治者としての立場から離れ、他者の研究の成果を受け入れるようになったからではないか。

5. おわりに

近代期は、傳統的な儒學研究が近代的學問としての姿を形成していく時期であった。特に、當時韓國の最高學府であった京城帝國大學では、招聘された日本人の學者による朝鮮儒學研究が活發に行われていた。韓國における生活と經驗が、自然に彼らを朝鮮儒學研究へ導いたのである。また、日本儒學とも関係がある李退溪のような人物によって、朝鮮儒學について、より強く對する關心を持つ學者もいた。

早い時期に渡韓し、他に先がけ朝鮮儒學研究に取り組んだ高橋は、韓國儒學展開の歴史を考察し、「主氣・主理」という儒學論争と黨派を關連させて理解している。彼は、李退溪と李栗谷を中心において、朝鮮儒學=朱子學という圖式を作り上げ、阿部も朝鮮儒學全般においては同様の認識を受け入れている。事實上、朝鮮時代の朱子學に對する批判的認識は、當時の日本人の學者らによって廣く共有されていたものである。ひいては朝鮮停滯論とあいまって、朝鮮儒學なるものは存在しない、あるいは化石化しているという認識が彼らに受け入れられたのである。

47) 高橋亨「朝鮮の公羊學派李白雲」『朝鮮學會會報』第21号、1954年、2頁。

しかし、このような朝鮮儒學認識は、韓國知識人たちの反論はもとより、研究が深化していくことによって、日本人の學者たちの間でも部分的に反省と修正が行われた。藤塚は既存の「朝鮮儒學は朱子學に他ならない」という一般的な認識に疑問を抱き、金正喜を中心とする18・19世紀の「經濟學派」(實學派)に關する資料を大量に集め、實證的な研究を進めた。そして、朱子學以外の儒學研究が併存したことを明らかにした。このように、京城帝國大學の中でも多様な視點と認識が存在していたのである。

京城帝國大學で行われた朝鮮儒學研究は、朝鮮史編修會のように事業として推進されたものではなく、むしろ研究者の關心にもとづいて個人的に進められていた。そのため、一つのまとまりとしての「朝鮮儒學」を作り上げることができず、日本人の研究者同士はもとより、韓國の儒學界とも活潑な交流を行うことはできなかったようである。しかし、彼らが京城帝國大學在職期に行った朝鮮儒學研究は、以降の日韓における韓國儒學研究に絶えず影響と刺激を與えてきたのである。

※ 이 논문은 2014년 5월 15일에 투고 완료되어,
2014년 5월 22일부터 6월 13일까지 심사위원이 심사하고,
2014년 6월 16일 편집위원회에서 게재 결정된 논문임.

참고문헌

- 『朝鮮支那文化の研究』京城帝國學會法文學會第二部論纂、第一集。
- 『朝鮮學報：高橋先生頌壽記念号』第14輯、朝鮮學會、1959年。
- 「京城帝國大學法文學部講義題目『青丘學叢』第八号以下、青丘學會。
- 「京城帝國大學法文學部講義題目『青丘學叢』第八号以下、青丘學會。
- 「藤塚鄰博士年譜」(座談會「先学を語る—藤塚鄰博士—」)『東方学』第69号、東方学会、1985年。
- 『京城帝國大學一覽』京城帝國大學、1927年。
- 阿部吉雄『日本朱子學と朝鮮』、東京大學出版會、1965年。
- 井上厚史「近代日本における李退溪研究の系譜學」『総合政策論叢』第18号、島根縣立大學、2010年2月。
- 井上厚史「封印された朝鮮儒教」『現代思想』第42卷第4号、青土社、2014年3月。
- 井上哲次郎『日本朱子學派之哲學』富山房、1905年。
- _____『日本陽明學派之哲學』富山房、1900年。
- 果川文化院編『후지스카 기증자료 목록집』Ⅱ、果川文化院、2009年。
- 金基柱「다카하시 도루의 朝鮮儒學觀을 다시 논함」『退溪學報』第132輯、退溪學研究院、2012年。
- 김채식「藤塚鄰의 삶과 학문」『秋史研究』第3号、秋史研究会、2006年。
- 權純哲「韓國思想史における『實學』の植民地近代性」『日本アジア研究』第2号、埼玉大學、2005年3月。
- _____「高橋亨の朝鮮思想史研究」『埼玉大學紀要教養學部』33、埼玉大學教養學部、1997年。
- 高橋亨「朝鮮儒學大觀」『朝鮮及滿州』50号、朝鮮及滿州社、1912年。
- _____「朝鮮人」『日本社會學院年報』第4年第三·四·五合冊、日本社會學院事務所、1917年。
- _____「朝鮮に於ける儒教」『斯文』第五編第二号、斯文會、1923年4月。
- _____『李朝仏教』、寶文館、1929年。
- _____「朝鮮の陽明學派」『朝鮮學報』第4輯、朝鮮學會、1953年。
- _____「朝鮮の公羊學派李白雲」『朝鮮學會會報』第21号、朝鮮學會、1954年、2頁。
- _____「丁茶山の大學經說」『天理大學學報』第18輯、天理大學學術研究會、1955年。
- 全京秀、宮原葉子譯「京城帝國大學の學術調査と「京城學派」の誕生—人類學分野にフォーカスを合わせて—」『朝鮮學報』第214輯、朝鮮學會、2010年。
- 通堂あゆみ「高橋亨と朝鮮」、川原秀城・金光來編訳『高橋亨朝鮮儒學論集』、東京：知泉書館、2011年。
- 藤塚鄰「物徂徠の論語徴と清朝の経師」『支那學研究』第四編、斯文會、1935年1月。
- _____『清朝文化東伝の研究』藤塚明直編、國書刊行會、1975年。

- 服部宇之吉 「京城帝國大學始業式に於ける總長訓辭」 『文教の朝鮮：京城帝國大學開學記念号』 6、朝鮮教育會、1926年。
- 홍원식 「張志淵과 高橋亨의 儒者·儒學者 不二·不一 論爭」 『오늘의 동양사상』 第13號、예문서원、2005年。
- 朴光賢 「식민지 『帝國大學』의 성립을 둘러싼 경합의 양상과 교수진의 유형」 『日本學』 第二八輯、東國大學日本學研究所、2009年。
- 박홍식 「高橋亨의 朝鮮陽明學研究에 대한 小考」 『오늘의 동양사상』 第13號、예문서원、2005年。
- 朴熙永譯·藤塚隣著·藤塚明直編 『秋史 金正喜의 또 다른 얼굴』、서울：아카데미하우스、1994年。
- 윤철규 他譯·藤塚隣著·藤塚明直編 『秋史 金正喜 研究：淸朝文化 東傳의 研究 한글완역본』 果川文化院、2009年。
- 尹絲淳 「『高橋亨의 韓國儒學觀』 검토」 『韓國學』 12、韓國學研究所、1976年。
- 李逢春 「불교지성의 연구활동과 근대불교학 정립」 『近代東아시아의 仏敎學』、東國大學出版部、2008年。
- 이승률 「日帝時期 韓國儒學思想史 著述史에 관한 一考察」 『東洋哲學研究』 第三七輯、東洋哲學研究會、2004年。
- 이형성 「高橋亨의 朝鮮儒學史 研究의 影響과 克復」 『高橋亨의 朝鮮儒學史』、예문서원、2001年。
- 李曉辰 「京城帝國大學における高橋亨とその學術活動」 『千里山論文集』 第85号、關西大學大學院文學研究科、2011年3月。
- _____ 「京城帝國大學の支那哲學講座と藤塚鄰」 『文化交渉』 創刊号、關西大學東아시아文化研究科、2013年1月。
- _____ 「高橋亨의 韓國學研究—儒學· 仏教· 文學研究を中心に」 『退溪學論集』 第12号、退溪學會（韓國）、2013年12月。
- _____ 「京城帝國大學と台北帝國大學の開設と哲學關連講座—中國哲學を中心に」 『文化交渉』 第2号、關西大學東아시아文化研究科、2013年12月。
- _____ 「近代日韓における金正喜認識—藤塚鄰の金正喜研究と『阮堂先生全集』刊行を起点として」 『東아시아文化交渉研究』 第7号、關西大學文化交渉學教育拠点、2014年。
- 鄭 珉 『18세기 한중 지식인의 문예공화국 - 하버드 옌칭도서관에서 만난 후지쓰카 컬렉션』 ソウル：문학동네、2014年。
- 조남호 「高橋亨、배중호、韓國儒學史」 『대동철학회지』 第55輯、대동철학회、2011年。
- 崔英成 「高橋亨의 韓國 儒學觀 研究」 『哲學研究』 第47輯、大韓哲學會、2000年。
- _____ 「高橋亨의 韓國 儒學觀 批判」 『오늘의 동양사상』 第13号、예문동양사상사연구원、2005年。
- 최재목·이효진 「張志淵과 高橋亨의 ‘紙上論爭’에 대하여」 『日本文化研究』 第32輯、동아시아日本學會〔韓國〕、2009年。

이상우 「한 식민지 국문학자가 마주친 ‘동양연구’의 길: 김재철론」 『人文研究』52, 嶺南大學人文科學研究所, 2007年。

ABSTRACT

The study on Joseon Confucianism of Keijō
Imperial University
-focused on Takahashi Tōru and Fujitsuka Chikashi-

Lee, Hyo-jin

Keijō Imperial University was built by Japanese government during the colonial period. Takahashi Tōru(1878-1967) and Fujitsuka Chikashi(1879-1948) were professors at Keijō Imperial University. Takahashi was a professor of Korean Language and Korean Literature and Fujitsuka was a professor of Chinese Philosophy. Despite of their position, they have in common that they were studying Chosen(Korea) Confucianism and their works have influenced in Korean Confucianism study.

In this paper, I elucidate how they studied Korean Confucianism and its contents in Keijō Imperial University. Though there was no major of Korean Confucianism, the two professors had studied Korean Confucianism because of some political necessity and private interest in Korean Confucianism. Environmental advantage and good supports from Keijō Imperial University also made it possible for them to concentrate on their studies.

I discussed the similarities and differences of the two Japanese professors and how their studies affected the viewpoint of Korean Confucianism study in modern days. They shared same idea as ordinary Japanese scholars that neo-Confucian in Joseon period was meaningless. After they started to study Korean Confucianism, however, their perspectives started to contradict each other. Takahashi claimed that there was no such thing as

Korean Confucianism, but on other hand, Fujitsuka considered that a Korean scholar named Kim Jeong-hui that played a major part in the interaction between the Confucianism of China and Japan in 19th century.

keywords : Keijō Imperial University, Takahashi Tōru, Fujitsuka Chikashi, Korean Confucianism study in modern days

